目次

チリの地震　ハインリヒ・フォン・クライスト 1

奥付

チリの地震　ハインリヒ・フォン・クライスト

　チリ王国の首都、サンチアゴにおける、何千人もの人々を没落に陥れた一六四七年の大地震が起きた瞬間、名をイェローニモ・ルゲラというひとりの罪に訴えられたスペイン人の青年が、それまで監禁されていた刑務所の柱のかたわらに立って、首を吊ろうとしていた。およそ一年ほど前から、市でも指折りの金もちの貴族のひとり、ドン・ヘンリコ・アステロンは、家庭教師として雇っていた屋敷からイェローニモを遠ざけていた。イェローニモが、彼のひとり娘、ドンナ・ヨゼーフェと睦まじい仲になったがためであった。老ドンが強い調子で娘を戒めた後も、彼の自慢の息子のずる賢い抜け目なさは、秘密の伝言をヘンリコに漏らして、われらの愛しい山の娘たちがいるカルメル会修道院に彼女を入れさせてしまうほど、その伝言はヘンリコを怒らせた。しかし、ある幸運な偶然によって、改めてヨゼーフェとそこで関係が結べると知ったイェローニモは、ある静かな夜、その修道院を彼らの幸福が成就する場所に変えたのであった。さて、それは聖体節の時であったが、修練女たちも従っていた修道女たちによる荘厳な手続きが始まろうとしていたその瞬間、鐘の音の告発をきっかけに、不幸なヨゼーフェは陣痛に襲われて、教会の階段の上に昏倒した。この事件は、異常なセンセーションを引き起こした。人々は、いささかも彼女の状況についての斟酌をせず、この女罪人を投獄した。そして、ヨゼーフェが産褥の床から回復するやいなや、大司教の命令による極めて厳しい審理は始まった。市の人々は、非常な怒りをもってこのスキャンダルについて語った。余りにも辛辣な噂がスキャンダルの生じたこの修道院全体を襲ったので、アステロン家のとりなしや、このうら若い乙女の過去からの非の打ちどころのない振る舞いを愛していた尼僧院長の希望をもってしても、怒りが修道院の掟を脅かす厳しさを和らげることにはならなかった。できたことといえば、憤激の余り、サンチアゴの老婦人や乙女たちがヨゼーフェに申し渡した火炙りを、副王の鶴の一声で、首切りに変えたくらいであった。処刑の行進が進む街道では、人々が窓辺を貸し与えて、家からは庇を取り払って、市の敬虔な娘たちは、神の報復が下される見世物を姉妹のように仲良く見物しましょうと、女友だちを招き入れた。その間に、ヨゼーフェと同じように獄に繋がれていたイェローニモは、これらの物事の恐ろしい変転について聞き知り、気も狂わんばかりになった。いたずらに、脱出を企てようとした。しかし、無鉄砲な想像の翼が彼を運ぶあちこちで、彼は門や石壁に突き当たった。格子窓をすり抜けようとの試みは、露見したことで、より狭小な監禁部屋を彼に招き寄せた。イェローニモは、聖母画の前に身を投げて、今、彼に救いを授けられるであろう唯一の存在である聖母マリアに、無限の情熱をもって祈りを捧げた。しかし、恐れていたその日が来ると、この状況には全く希望がないという確信が

イェローニモの心にも宿ったのであった。ヨゼーフェを刑場に連れ出したという合図の鐘が鳴るやいなや、絶望がイェローニモの魂を襲った。生きることに嫌気がさしたイェローニモは、首縄で自らに死を与えることを決意した。偶然にも、縄は手元に残されていた。すでに述べたように、今やイェローニモは、つけ柱の下に立って、この苦しみに満ちた世界から自分を引き出してくれる縄を、廻り縁にはめられた鉄の留め金に引っかけていた。と、突然、まるで天空が瓦解したように、大音響と共、市の大部分が陥没して、生きとし生けるもの全てが瓦礫の下に葬り去られた。イェローニモ・ルゲラは、驚きの余り、立ち尽くしていた。それまでの意識が粉々になったかのように、転ばぬよう、彼は死のうとしていた当の柱にしがみついていた。床は足元で揺らぎ、獄の全ての壁には亀裂が生じて、建物全体が、街道の方に倒れ込みそうになっていた。ただ、こちらの建物のゆっくりした崩落に相応した向かいの建物の崩落だけが、たまたまできたアーチにより、それ自体の完全な倒壊を防いでいた。髪の毛を逆立てさせて、膝から折れそうになりながら、ガクガクと震えたイェローニモは、陥没した床を乗り越えて、両方の建物の正面衝突が獄の前方の壁に開けた裂け目まで滑っていった。ようやく自由になったと思ったのも束の間、すでに十分に振動を与えられていた街路全体は、二度目の余震によって、脆くもすっかり倒壊してしまった。自分がどうしてこの全体的な滅亡から救われたのかの意識もなく、イェローニモは、灰塵と残骸を乗り越えて、死があらゆる方向から攻撃を仕かけてくるのにも構わず、最寄りの市の門のひとつに足を急がせていた。ところが、そこでさらに一棟の建物が崩落して、辺り一面に巻き散らされた瓦礫が、彼をとある脇道の方に狩り立てていった。しかし、そこには火煙の中、キラキラと煌めきながら、破風という破風ですでに炎が揺らめいており、震え上がった彼を第二の脇道に追い立てていった。ところが、またしても、岸辺よりもはるかに高いところから、マポッホ河の急流が彼を目がけてなだれ落ちてきて、叫び声を上げる彼を第三の脇道に引きさらっていった。そこには、死体の山があった。瓦礫の下からは、呻き声がしていた。燃え盛る家からは、人々の金切り声が聞こえていた。人と動物が、大波と戦っていた。果敢に救いの手を差し伸べる者がいる一方で、死人のように真っ青になって立ち尽くす者や、震えながら、言葉もなく、天に向かって両手を差し伸べる者とがいた。イェローニモは、門まで辿り着いて、門の向こうにある丘に登ると、失神して、倒れ込んでしまった。ようやくまた目を覚まして、市に背を向けた形で地面から半身を起こすまでに、十五分ほど、深い人事不省の状態で横たわっていたであろうか。どのようにして今の状態になったのかも分からず、彼は額と胸に手をやっていた。海からの西風が、再び蘇った彼の生命に息を吹き込んで、様々な方向を経巡った後、視線がサンチアゴとは反対の花々の咲き乱れる地域に落ちると、言葉では言い表わせない幸せな気分が彼の心を掴んだ。ただ、あらゆるところで見い出される錯乱した人々の群れだけが、彼の心を締めつけるのであった。最初、自分と彼らがなぜここにやってきているのかが、イェローニモには分からなかった。後ろを振り返り、眼下に陥没した市を目にしてようやく、つい先頃、体験したばかりのあの衝撃の瞬間が、彼の脳裡に甦ってきた。額が地面につくほど深くひれ伏すと、イェローニモは、奇跡の生還に対する感謝の祈りを神に捧げた。心に刻印された恐ろしい記憶が他の全ての記憶を拭い去ってしまったように、自分はまだ様々な現象に満ちた愛すべき生を享受できるという喜びに、彼はポロポロと涙を零した。しかし、それから

ほどなく、指に嵌めた指輪に気がつくと、急にヨゼーフェのことが思い出された。それと共、刑務所、そこで聞いた鐘の音、他ならぬ瓦解が続いたあの瞬間が、まざまざと脳裏に浮かんできた。深い憂鬱で、再び、彼の胸は満たされた。祈りは、彼に後悔を強い始めた。雲の上で全てを統治する存在を、彼は恐ろしいと感じた。彼は、全ての市門から溢れてくる、家財を救い出すのに忙しい群衆の中に身を投じてみた。思い切って、アステロン家の娘はどうなったのか、死刑は執行されたのかを、遠慮しながら、問いかけてみた。しかし、詳しい消息を伝える者は、ひとりもいなかった。大量の家財を両肩に負って、ほとんど地面につきそうなくらいに身体をねじ曲げて、二人の幼な子を胸に抱いたひとりの女は、まるでその目で見たかのように、通りすがりざま、ヨゼーフェは打ち首になったと、言った。イェローニモは、クルリと踵を返した。それから、時間を数えてみて、刑の執行をはっきり確信すると、人気のない森に座り込んで、溢れる悲しみに身を委ねた。自然の破壊的な本性が再びわが身に降りかかることを、彼は望んだ。自然の成り行きで、死があらゆる方向から彼に救済を与えようとしていたその瞬間、悩める魂が求めていた死からなぜ逃げようとしたのか、彼には理解できなかった。たとえ、今、あの樫の木が根こそぎになり、大枝が倒れてきても、もう思い惑うまいと、彼は誓った。やがて、涙も涸れ果てて、熱い涙の間から再び希望が顔を見せると、彼は立ち上がり、あらゆる方面からのその土地の捜索を開始した。人々が群れ集っている丘という丘を訪ねて歩いた。避難民の流れがまだ蠢いているあらゆる街道で、彼は人々に会って回った。何か、女性用の衣装が風に翻めているのが見える場所に、足を震わせながら、彼は走った。しかし、その衣装が、愛しいアステロン家の娘の身を包んでいるということはなかった。そして、太陽が傾き、それと共、すでに希望も沈もうというその時、ある断崖の縁に、彼は辿り着いたのであった。そこからは、ほとんど人影のない広い谷間の眺望が開けていた。何をするでもなく、彼が、幾つかの人々の集まりの中をサッと抜けて、来た道をもう一度帰ろうとしたその瞬間、突然、谷間を流れる急流の側で、幼な子を川の水で洗うのに忙しい若い女の上に、ふと視線が落ちた。その光景を一目見るやいなや、心臓が激しく動悸した。予感に胸を膨らませて、岩場を駆け降りると、彼は叫んだ。おお、聖母よ、マリアよ！　そして、女が、その物音を聞いて、内気そうに周りを見回した時、彼はヨゼーフェを見い出した。天の奇跡が救い出した不幸な二人は、どれほどの恍惚をもって抱擁を交わしあったか！　死への行軍の途上、ヨゼーフェが処刑場まであと少しという時、突然、幾つかの建物のメリメリという崩壊によって、処刑に向かう行列全体が蜘蛛の子のように散らされた。それゆえ、最初、怯える足取りは、最寄りの市の門へとヨゼーフェを運んだ。しかし、すぐにまた平静を取り戻すと、幼い、寄る辺のないわが子が残された修道院に急ぐため、彼女は踵を返した。その修道院全体は、すでに炎の中にあった。彼女の最期となるはずであったその瞬間、赤ん坊の養育を約束してくれたあの尼僧院長が、今、まさに門の前に立ちながら、子どもの救出のための助力を求めて叫んでいた。ヨゼーフェは、もうもうと挑みくる煙にも怯まず、すでにあらゆる部分から崩壊しつつあった建物の中に飛び込み、万軍の天使たちに守られたように、子どもを胸に、傷ひとつ負わず、門のところからすぐにまた姿を現わした。頭上で両手を打ちあわせた尼僧院長の腕の中に、ヨゼーフェが身を投げようとしたその瞬間、その尼僧院長は、全員の尼僧たちと共、落ちてきた屋敷の破風によって、惨めなやり方でグシャリと潰されて

しまった。この恐ろしい光景を前に、ヨゼーフェは後退りした。素早く尼僧院長のまぶたを閉じさせると、すっかり恐怖に震えながら、天から再び賜わった愛しいわが子を滅亡から救うため、そこから逃げ出した。数歩も進まぬうち、たった今、教会の残骸から潰れた状態で引き出されたばかりの大司教の遺体に、もう行き当たった。副王の宮殿は陥没し、判決が読み上げられた法廷は炎に包まれて、父の屋敷があった場所には湖が入り込み、赤味がかった蒸気が立ち昇っていた。ヨゼーフェは、平静を保とうと、全身の力を掻き集めた。胸からは苦しみを取り除いて、街道から街道へ、戦利品を手に雄々しく歩みを進めた。門まであと少しのところで、イェローニモがため息をついていた刑務所が瓦礫になっているのが目に入った。一目見るなり、足はもつれて、曲がり角では失神して倒れそうになった。しかし、その瞬間、すでに振動で完全にグラついていた建物が背後で倒壊したので、それは驚愕によってさらに強められて、もう一度、立ち上がるようにと、彼女の背中を強く押した。彼女は、子どもに唇を押しつけると、目からは涙を拭い、自分を取り巻く嫌悪を催させる出来事には、それ以上、注意を払わず、市の門まで辿り着いた。開けた場所の中でわが身を見い出すと、必ずしも倒壊した建物に居住する全員が下敷きになった訳ではないことに、彼女は気がついた。近くの分かれ道のところにジッと立ち、この世で小さなフィリップの次に大切な人がよもや現われるのではと、彼女は待ってみた。しかし、誰も現われず、雑踏がどんどん数を増してくるので、先に進み、そこでまた振り返って、彼女は待っていた。それからは、逝ったと信じた彼の魂に祈りを捧げるため、ポロポロと涙を流しながら、松林で影になった暗い谷の奥に分け入っていった。そして、その谷で、この愛する人と、あたかもその谷がエデンの園であるかのような幸福を、見い出したのであった。今、こういう全てを、彼女は感動してイェローニモに語って聞かせた。話し終えるや、接吻させるため、彼女は子どもをイェローニモに手渡した。——わが子を受け取ると、言いがたい父性愛を感じながら、イェローニモは、子どもをあやした。知らぬ顔を前に子どもがむずかるので、終わりのない愛撫で、彼はその口を噤ませてやった。そうこうするうち、この世のものとは思えない、美しい夜が降りてきた。驚くほど甘いかぐわしさに満ちた、詩人にしか夢見れぬような、銀色に輝く、静かな夜であった。急流の河岸のあちこちでは、月光のきらめきの中、人々は居場所を定めて、かくも痛ましい一日の疲れを癒すため、柔らかい苔や木の葉で褥を用意していた。これらの哀れな者たちは、ある者は屋敷を、ある者は妻子を、ある者は全財産を失なったことで、相変わらず、悲痛な叫び声を上げていたので、イェローニモとヨゼーフェは、二人の魂の密やかな歓喜の声で彼らの気分を害さぬよう、こんもりした繁みの部分にその身を隠したのであった。二人は、かぐわしい匂いのする実をたわわにつけた枝を大きく伸ばした、一本の立派なザクロの樹をそこに見い出した。こずえでは、一羽のナイチンゲールが官能の歌を奏でていた。イェローニモは、その場でザクロの幹に背を凭せて座り、ヨゼーフェは彼のマントに包まれて彼の両膝の間に、フィリップはヨゼーフェの両膝の間に座り、くつろいでいた。月光の粒を撒き散らしたザクロの樹の影が、頭上をあっちへ行ったり、こっちへ行ったりした。二人が眠りに就いた頃には、朝焼けのため、再び、月はすっかり色褪せてしまっていた。というのも、修道院の庭、刑務所、お互いに何を悩むことがあったのかということについて、話すことが際限なくあったのである。そして、二人を幸福にするために、世界がどれほどの悲惨さに苦

しまねばならなかったかに思い至って、二人は深い感動に襲われたのであった！　二人は、余震が落ち着いたらすぐ、ヨゼーフェの親切な女友だちがいるラ・コンセプシオンまで行き、そこで手に入れられる小額の前借金を使って、イェローニモの母方の親戚が住むスペイン行きの船に乗り込み、そこで幸せな余生を送ることを決心した。そして、何度も接吻を交わすと、眠りに就いたのであった。

目が覚めると、すでに太陽は天の高いところにあった。自分たちの周囲でも、焚き火を前に、何組かの家族がささやかな朝食の準備をしているのに、二人は気がついていた。どうやって家族に食料を調達したものかと、イェローニモが考えていると、幼な子を抱えて、裕福に着飾った青年がヨゼーフェのところにやってきて、丁寧に尋ねた。少しの間だけ、この哀れな幼な子（この子の母は、受傷して、あちらの樹の下で臥しております）に、乳を分けてはもらえませんか？　ヨゼーフェは、彼が知りあいなのを見て取ると、ある種の困惑の中に投げ入れられた。しかし、青年はその困惑の意味を誤って理解すると、こう続けた。ほんの少しでよいのです、ドンナ・ヨゼーフェ。この子は、われわれ全員を打ち負かしたあの災禍が起きて以来、何も口にしていないのですから。彼女は言った。「わたしは、口ごもってしまいました――でも、それは別の理由からなのです、ドン・フェルナンド。このような苦難の時、自分のもち物を分け与えるのを、一体、誰が拒むでしょう。」そう言って、自分の子どもは夫に預けて、その小さな見知らぬ子どもを受け取ると、自分の胸を含ませたのであった。この善行に深い謝意を表わすと、ドン・フェルナンドは聞いた。一緒に、仲間のところまでいらっしゃいませんか？　あちらでは、ささやかな朝食が火にかけて用意されています。ヨゼーフェが答えた。ご招待を喜んでお受けしますわ。イェローニモにも異論がなかったので、ヨゼーフェは、ドン・フェルナンドの後ろを、彼の家族のところまでついていった。そこでは、非常に徳性の高い若い婦人とヨゼーフェが認める彼の二人の義妹が、手厚く、愛情深く、彼女をもてなしてくれた。脚に大怪我を負って、地べたに臥していたドン・フェルナンドの妻、ドンナ・エルビーレは、ヨゼーフェが胸に抱いた自分のやつれた子を見ると、自分の方に彼女を引き寄せて、優しい言葉をかけてきた。肩に怪我をしたドン・フェルナンドの義父、ドン・ペドロも、これ以上ないくらい人懐っこい様子で、彼女に頷きかけてきた。――イェローニモとヨゼーフェの胸には、奇妙な考えが渦巻いていた。そんな風に、懇ろに、親しげにもてなされていると、過去、つまり、法廷、刑務所、あの鐘の音をどう考えるべきなのか、分からなくなってくるのであった。全ては夢に過ぎなかったのか？　彼らを震撼させた、あの恐ろしい一撃以来、皆の心は宥和しているようであった。皆は、それより昔の記憶に遡ることがなかった。ただ、その前の日の朝の見世物の招待を女友だちから受けながら、それを断っていたドンナ・エリーザベトだけは、時折、夢見るような視線をヨゼーフェの上にジッと留めていたが。とはいえ、何かしら新奇で、身の毛もよだつ不幸を伝えるその報告は、滅多に現在から遠ざかることがないヨゼーフェの魂を、再び、現在の方に引き攫っていった。その報告は伝えていた。最初の大きな震動の直後、市が、どのようにして、男たちの目の前で胎児を産み落とす婦人で溢れることになったのか。修道僧たちが、どのようにして、十字架を手にあちこちを駆け回って、最後の審判がやってくる！　と、大声を出すことになったのか。副王の命令で、教会を明け渡させようとした衛兵たちが、どのようにして、チリの副王なんているものか！　という罵声

を浴びせられることになったのか。災禍が最悪の状態にあった時、掠奪者たちを食い止めるために、副王が、どのようにして、絞首台を打ち建てさせざるをえなくなったのか。そして、燃え盛る屋敷の裏口から逃げ出した無実の人が、軽率にも、家主に捕えられて、どのようにして、すぐに絞首台に吊られることになったのか。ヨゼーフェが忙しく怪我の手当をしていたドンナ・エルビーレは、これらの物語が最も熱心に話されていたその時、次のようにして、彼女に話しかける機会をもった。あの恐怖の一日を、あなたはどのように過ごされたのですか？　そして、ヨゼーフェが、不安で胸を一杯にしながら、自らの物語の大まかな要点を伝えると、彼女は、婦人の目に涙が溢れるのを見るという喜びをえた。ドンナ・エルビーレは、彼女の手を取って、ギュッと握り締めると、もう何も言わなくてよいからと、目配せをした。ヨゼーフェは、福者たちに囲まれているような気分であった。どれほどの災禍が世界に降りかかったとしても、過ぎ去ったこの一日は、神が他の誰にも与えたことがない慈愛の日であったと、彼女の中の抑え切れない思いは語っていた。そして、実際、人々のあらゆる世俗的な財物が滅失して、あらゆる生物が生き埋めを迫られたこの恐怖の瞬間の只中でも、人間の精神そのものは、美しい花として咲き誇るように思われた。見渡す限りの平原のあちこちで、あらゆる身分からなる男女、つまり、侯爵や乞食、貴婦人や農婦、国家事務官や日雇い人夫、修道士と修道女が、入り混じって、横になっていた。あたかも普遍的な不幸が、そこから生き残った全ての人間をひとつの家族にしたように、お互いに同情し、生活のために守ってきたものからお互いに出しあい、喜んでそれを分かちあっていた。今や、茶席のために世間が材料を提供してきたつまらぬよもやま話のかわり、途方もない行為の例が語られるようになった。かつては、ほとんど社会で注目されてこなかった人々が、ローマ人のような偉大さを表わしていた。まるで、生命はどこにでもあるものに過ぎず、一分後には取り戻せるとでもいうような、豪胆さ、嬉々とした危険軽視、自己否定、超人的な自己犠牲、迷いのない生命放棄を表わす山のような実例があった。実際、その日、何らかの感動的な行為を体験しなかったり、自ら高潔な行為を行なわなかった者はひとりもなく、それぞれの人の胸に宿った悲しみは、多くの甘やかさや喜びと混じりあったので、ヨゼーフェもそう感じていたように、一方では幸福の総量が減っていたとしても、他方でそれが同量だけ増えていないとは、断じ切れないのであった。二人でこの観察についての議論を静かにやり尽くした後、イェローニモは、ヨゼーフェの腕を取り、濃い影を落とすザクロの森の葉むらの下を、言葉では表わせない幸福感に浸りながら、彼女を連れて、あっちに行ったり、こっちに行ったりした。イェローニモが言った。この公けの雰囲気や全体の関係の変化を受けて、ヨーロッパに船出するという決心は、諦めようと思っています。まだもし副王が生きているなら、もともと僕の事件に常に好意的な態度でいた彼の前に僕はひれ伏すでしょう。つまり、あなたとチリに残るというのが僕の希望です（そう言って、彼女に接吻をした）。ヨゼーフェが答えた。同じような考えは、わたしの頭にも浮かんでいました。まだ父がまだ生きているのなら、彼がわたしを赦すということを、もはやわたしは疑っていません。しかし、ひれ伏すかわり、ラ・コンセプシオンまで行き、そこから文書で副王との宥和工作をする方がよいとわたしは思っています。あそこなら、いずれにせよ、港がすぐそこです。交渉が望ましい結果を生むという最高の状態になれば、もちろん、また簡単にサンチアゴまで戻れます。しばらく熟考した後、イェローニモは、

この対策の賢明さに対して賛意を表わし、未来の明るい瞬間について展望しながら、並木道を少し散歩した後、ヨゼーフェと一緒に、仲間のところに戻っていった。

そうするうち、午後になった。余震が弱まり、あちこちに群がる避難民たちの心が幾分落ち着きを取り戻すと、さらなる不幸の抑止を神に祈願するため、地震の被害を免れた唯一の教会であるドミニコ教会で、修道院の高位聖職者自らによるミサが執行されるという知らせが広まっていた。すでにあらゆるところから民衆が溢れ出て、なだれを打って市に急いでいた。ドン・フェルナンドの仲間たちの中でも、次のような問いが発せられていた。この式典に参列すべきではないのか、民衆の行進に続くべきではないのか？

それに対して、ドンナ・エリーザベトは、少しの胸苦しさを感じながら、昨日、その教会でどんな種類の不幸が生じたのかを、思い起こしていた。そういう感謝の礼拝は、実際、何度も繰り返されるでしょう。その時には、すでに危険は過ぎ去っているでしょうから、人々は、なお大きな陽気さ、安らかさで、その感情に浸ることができます。少し取り憑かれたように、すぐにヨゼーフェは立ち上がると、こう主張した。創造主の目の前で塵の中に顔を押しつけたいという衝動を、不可知の崇高な力が展開している、今、この時ほど、強く感じたことはありません。ドンナ・エルビーレが、ヨゼーフェの意見に熱烈に賛意を表明した。彼女は、ミサを聞くべきですと主張すると、ドン・フェルナンドに一行を引率するように要求したので、これに応えて、ドンナ・エリーザベトを含む全員が、椅子から腰を浮かせるまでになった。しかし、そのドンナ・エリーザベトは、胸を激しく上下させながら、簡単な出発の準備ですらためらいながら行なう様子で、どうかしましたか？　という問いかけにも、それがどういう種類の不吉な予感なのかは、自分でもよく分かりませんという答えだったので、ドンナ・エルビーレは、彼女を落ち着かせると、わたしや、わたしの病気の父と一緒にここに残るようにしたらよいですよと、勧めたのであった。ヨゼーフェが言った。それなら、ドンナ・エリーザベト、ご覧のように、わたしのところに再びやってきたこの小さな可愛い子どもも預かってもらえませんか。ええ、喜んでと、ドンナ・エリーザベトは答えると、その子を預かろうとしたが、このような不正に対して、子どもが悲痛な泣き声を上げながら、どうにもそれを受け入れなかったので、微笑みながら、もう少し預かることにしますわと言って、その子が再び泣き止むまで、接吻したのであった。そういうことで、その振る舞いがもつ威厳や上品さにすっかり魅了されていたドン・フェルナンドが、ヨゼーフェに腕を差し出した。幼いフィリップを連れたイェローニモは、ドンナ・コンスタンツェをエスコートした。その集まりにいた残りのメンバーたちが、その後に続いた。このような順序で、一行は市に向かったのであった。そこから五十歩も進まぬうち、熱心に、しかし、密やかにドンナ・エルビーレと話をしていたドンナ・エリーザベトが、ドン・フェルナンド！

と、呼ぶのが聞こえて、落ち着かない足取りで、一行を追うのが見えた。ドン・フェルナンドは立ち止まると、クルリと後ろを振り向き、ヨゼーフェの腕は放さず、ドンナ・エリーザベトが近づいてくるのを待っていたが、少し離れたところで、彼がやってくるのを待つかのようにドンナ・エリーザベトが立っていたので、どうしましたか？　と、聞いた。言われたドンナ・エリーザベトは、見たところ、気乗りのしない様子ではあったが、彼のところまで来ると、ヨゼーフェには聞かれぬよう、二言三言、彼の耳許に囁きかけた。で？　と、ドン・フェルナンドが聞いた。これから起きるかもしれない不幸？

ドンナ・エリーザベトが、取り乱した表情で、彼の耳許に囁き続けた。怒りで顔を赤く染めながら、ドン・フェルナンドが答えた。そうなったら、そうなった時です！　ドンナ・エルビーレは、大船に乗った気もちでいて下さい。そうして、ヨゼーフェのエスコートを続けたのであった。――一行がドミニコ教会に到着した時にはすでに、オルガンが華やかな技巧によって演奏されていた。そこでは、恐ろしい数の人の群れが蠢いていた。人だかりは、門の前の教会前の広場にまで達して、壁の高いところにある絵画の額縁の中には少年たちがへばりつき、何かを期待するような目つきで、帽子を握り締めていた。全てのシャンデリアからは光が降り注ぎ、夕焼けの始まりと共、柱の列は神秘的な影を投げて、教会の一番奥にある色つきガラスを組み込んだ大きな薔薇窓は、それを照らす夕陽そのもののようにあかあかと燃えていた。そして、突然、オルガンが鳴りをひそめて、全員が息を止めたかのように、全ての参集者の中を静寂が支配した。この日のサンチアゴのドミニコ教会におけるほどの情熱の炎がキリスト教会から天に昇ったことはなかった。そして、イェローニモとヨゼーフェの心臓ほど熱い激情を天に捧げた人間の心臓もまたなかったのであった！　祭祀用の装飾をつけた、最古参の僧会議員のひとりが説教壇から行なう説教によって、儀式は始まった。彼はすぐ、短白衣によって緩やかにくるまれた震える両腕を天に向かって高く掲げながら、倒壊して灰燼と化した世界の一部でも、まだ人類がためらいがちな声を神に届けられることへの賞揚、賛美、感謝からまず着手した。全能者による目配せで何が生じたのかを、彼は描き出してみせた。最後の審判も、これほど恐ろしくはない。彼が、聖堂の壁面に入った一本の亀裂を指差しながら、昨日の地震は運命の日の単なる予兆であると名づけると、会衆の上をある種の戦慄が走った。それから、神官のような雄弁さの奔流の中、市の道徳的な退廃というテーマに話は移っていった。ソドムやゴモラのような嫌悪の対象を見い出さなかった彼は、彼女に対して矛先を向けた。そして、地上からサンチアゴが完全に抹殺されずにいるのは、単に神が無限に寛容であるからだとした。そして、説教師が、この機会を捕まえて、カルメル会修道院の庭で犯された悪事についてダラダラと弁じると、そのことは、すでに彼の言葉で十分に切り裂かれていたわれらが二人の不幸な心臓を短剣のように刺し貫き、社会の中で見られるそれへの赦しは不信心であるとして、多くの呪詛の言葉に満ちた逸脱の中、実行者たち、文字通りにいえば、あらゆる地獄の王子たちにその魂を引き渡したのであった！　ドンナ・コンスタンツェが、イェローニモの腕を引っ張りながら、大声を出した。ドン・フェルナンド！　しかし、その人は、断固としながら、同時に、二人が結びついていたのと同じくらい密やかな調子で、こう答えた。「喋らないで、ドンナ・コンスタンツェ。しっかりと一点だけを凝視して、失神したふりをするのです。そうすれば、この教会を出られます。」しかし、逃走のために案出されたこの巧妙な計略をドンナ・コンスタンツェが実行に移す前に、僧会議員の説教を高らかに遮って、すでにひとつの声が発せられていた。退け、サンチアゴの市民たちよ、ここに、二人の不信心者がいる！　二人の周りで人々がより大きな驚愕の輪を作って後退りをすると、恐怖に満ちた第二の叫び声が尋ねた。どこに？　ここに！　と、第三の声が答えて、聖なる獰猛さに突き動かされて、ヨゼーフェの髪を引っ張ったので、彼女は、ドン・フェルナンドの支えがなければ、彼の子どもと共、地べたに崩れ落ちるところであった。気でも狂ったのか？　と、若者は叫び、片方の腕でヨゼーフェを抱き寄せた。「皆さん、

ご存知でしょう、わたしは、この市の司令官の息子、ドン・フェルナンド・オルメッツです。」ドン・フェルナンド・オルメッツ？　と、突然、彼のすぐ目の前に現われた靴直しが叫んだ。この男は、ヨゼーフェの下で働いたことがあり、少なくとも、彼女の小さな足と同じくらいは、彼女に対する面識があった。この子の父親は誰だ？　と、恥知らずな傲慢さで、男がアステロン家の娘に聞いた。この質問によって、ドン・フェルナンドは顔色を青ざめさせた。彼は、内気そうにイェローニモのことを見たり、誰か自分を知っている人はいないか？　と、会衆を眺め渡したりした。このような恐怖の状況に押されて、ヨゼーフェが叫んだ。この子は、あなたがお考えのようなわたしの子どもではありません、ペドリロ親方。彼女は、無限の不安を抱えて、ドン・フェルナンドを見ながら、つけ加えた。皆さんもよくご存知でしょう、この年若い紳士は、この市の司令官のご子息、ドン・フェルナンド・オルメッツです！　靴直しが尋ねた。市民の皆様の中で、この若者をご存じの方はいませんか？　野次馬たちの何人かが、こう繰り返した。誰か、イェローニモ・ルゲラを知らないか？　いたら、一歩前に出てくれ！　まさにその瞬間、騒動に驚いた小さなユアンが、突然、ヨゼーフェの胸を離れて、ドン・フェルナンドの腕の中に入り込もうとした。すると、こいつが父親だ！　という叫び声が上がった。やつがイェローニモ・ルゲラだ！　という第二の叫び声が、やつらこそが涜神の徒だ！　という第三の叫び声が上がった。それから、石打ちの刑を！　石打ちの刑を！　というイエスの神殿に集まった全キリスト者たちの叫び声が始まったのである！　事、ここに至り、イェローニモが大声を上げた。待て！　化け物ども！　探しているイェローニモ・ルゲラなら、ここにいるぞ！　その人のことは放してやれ、何の罪もないのだから！――イェローニモのこの言葉に混乱し、猛り狂った暴徒たちは立ち尽くした。多くの人々が、ドン・フェルナンドを掴んでいた手を放した。と、その瞬間、慌てた様子でひとりの海軍将校の高官が駆け寄ってきて、群衆を掻き分けながら、こう尋ねた。ドン・フェルナンド・オルメッツ！　一体、どうしたのです？　今や、完全に解放されたドン・フェルナンドが、真の英雄ゆえの思慮深さをもって、答えた。「ええ、ご覧下さい、ドン・アロンツォ、この人殺しの極悪人たちを！　この立派な紳士が、荒れ狂う群衆を落ち着かせるため、イェローニモ・ルゲラを騙ってくれなければ、わたしは殺されていたかもしれません。申し訳ありませんが、双方の安全のため、この方とあの若いご婦人と、それからこの悪党を逮捕して下さい。」と、ペドリロ親方の首を押さえながら、「なぜなら、全ての暴動を扇動した張本人なのですから！」靴直しが叫んだ。ドン・アロンツォ・オノーレヤ様、あなた様の良心に向かって申し上げます。この娘は、ヨゼーフェ・アステロンではありませんか？　さて、ヨゼーフェをよく知るドン・アロンツォが、そこで返事に窮していると、そのことで、怒りに新たに点火させられた幾人かが、こう叫んだ。こいつがヨゼーフェだ、こいつがヨゼーフェだ、死刑にしろ！　それゆえ、ヨゼーフェは、それまでイェローニモが抱いていた小さなフィリップを小さなユアンと一緒にドン・フェルナンドの腕に預けると、こう言った。行って下さい、ドン・フェルナンド、あなたの二人の子どもたちは、救って下さい。わたしたち二人の運命は、二人で引き受けますから！　ドン・フェルナンドは、二人の子どもを受け取ると、こう言った。仲間の誰かに危害が加えられるのを見ているくらいなら、死んだ方がましです。彼は、海軍将校に剣を貸して下さいと頼むと、ヨゼーフェには腕を差し出して、後

ろの二人には自分についてくるように勧めた。そういう準備により、人々が適切な敬意を表わしながら、道を開けてくれるようになったので、実際、彼らは教会から外に出て、自分たちは救われたと思うまでになった。しかし、同じように人で溢れていた教会の前庭に一歩を踏み出すと、荒れ狂う一団の中から、先程からずっと彼らにつき纏っていたある叫び声が聞こえた。こいつが、イェローニモ・ルゲラです、市民の皆さま。なぜなら、わたしはこの男の実の父親なのですから！　そうして、恐ろしい棍棒の一撃で、ドンナ・コンスタンツェのいる横の地面に、イェローニモをダラリと伸してしまった。イエス・マリア！　と、ドンナ・コンスタンツェが叫び声を上げて、義兄のドン・フェルナンドの方に逃げた。しかし、修道院の淫売め！　という声が、別の方向からの次なる一撃と共、すぐに響き渡って、それは彼女を絶命させると、イェローニモの横にバッタリと伸してしまった。恐ろしいことを！　と、見知らぬ人の叫ぶ声がした。この方は、ドンナ・コンスタンツェ・クザーレスであったのに！　嘘をつくから、いけないのだ！　と、靴直しが答えた。本物のヨゼーフェを探し出して、殺してしまえ！　ドン・フェルナンドは、コンスタンツェの死体を見るやいなや、憤りで顔を真っ赤にした。剣を抜き、振り回して、男を急襲したので、このゾッとする出来事を引き起こした狂信的な殺人鬼が、身体を捻って、その猛烈な攻撃をかわしていなければ、八つ裂きになっていたところであった。しかし、ドン・フェルナンドにも押し寄せる群衆は止められず、さようなら、ドン・フェルナンドと子どもたち！　と、ヨゼーフェは大きな声で言った。――さあ、ここでわたしを殺しなさい、あなた方、血に飢えた虎！　そうして、戦いを終結させるため、意図して、その一団に身を投じたのであった。ペドリロ親方が、棍棒で彼女を殴り倒した。ヨゼーフェの次に、やつの私生児も地獄に送ってやれ！　と、血のりを全身に浴びながら、親方が叫び声を上げると、まだ満たされぬ殺人衝動に駆られながら、さらに先に進んだ。この神のごとき英雄、ドン・フェルナンドは、今や、教会に身を凭れさせながら、屹立していた。左手には二人の子ども、右手には剣を携えていた。ひと振りする度にひとりを、彼は雷電によるかのように打ち倒していった。ライオンでも、これほどうまくは防御できまい。七匹の血に飢えた犬たちが、彼の前に死体となって横たわった。サタンの一味の首領自らも、傷を負わされた。しかし、このペドリロ親方は、幼な子のひとりの足をドン・フェルナンドの胸元から掴み取り、頭上を高く振り回した後、教会の柱の角で粉々にするまで、大人しくなることはなかった。それから、周囲が静かになり、皆もその場から退出した。ドン・フェルナンドは、脳から髄液を滲み出させて、足元に横たわっている小さなユアンを見い出すと、名づけようのない悲しみに襲われて、天を仰ぎ見た。あの海軍将校が再び現われて、ドン・フェルナンドを慰めようとして、様々な事情が正当化してくれるとはいえ、今回の不幸を巡る自らの不作為が、わたしには遺憾でなりませんと、断言してみせた。しかし、ドン・フェルナンドは、あなたを非難する点はどこにもありませんと言うと、今はただ、遺体の搬送を手伝ってもらえませんかと、頼んだのであった。深まる夜闇の中、全ての遺体がドン・アロンツォの屋敷に運び込まれて、ドン・フェルナンドもまた、小さなフィリップの顔を見て、ボロボロと涙を流しながら、遺体の後に続いて、ドン・アロンツォの屋敷に入った。彼もまたドン・アロンツォの屋敷に宿泊したが、ひとつには、彼女が病気であったため、ひとつには、彼女が今回の事件での彼の態度をどう判断するかが分からなかったため、偽りの

作り話をして、長い間、今回の不幸の全容を妻に報告するのをためらっていた。しかし、それから時を経ず、ある訪問によって、起こった全てをたまたま聞き知った卓越したこの婦人は、静かに母としての悲しみを泣くと、ある朝、涙の残りをキラキラと輝かせながら、夫の首に抱きつき、接吻したのであった。そういうことで、ドン・フェルナンドとドンナ・エルビーレは、その見知らぬ幼な子を養子として引き取った。ドン・フェルナンドは、フィリップとユアンを、そして、どうやって二人を授かったのかを比べてみて、ほとんど自分は喜ぶべきと感じたのであった。

奥付

チリの地震　ハインリヒ・フォン・クライスト

著　　bambus

制　作　Puboo
発行所　デザインエッグ株式会社